

※文字の大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。  
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、(写真1) (表1) などと文中に記載し、右ページに(写真1) (表1) などと表記の上、貼り付けてください。  
 ※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は変更可能です。  
 ※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

※事務局記入欄

【様式 2】

No. 23

**エントリー学校名：**福岡県立小倉西高等学校

**活動名：**MCTM (みちたま) 計画

北九州市 SDG s 連携防災体験学習



**解決すべき課題：**保護者アンケートの結果から、防災教育(発災時の安全確保)の充実強化の要望があり、生徒への防災に関する意識調査を実施したところ、自然災害への不安を感じているものの他人事としてとらえている傾向が明らかとなった。また、本校は3年前に近隣の河川が決壊しており、迅速な対応・十分な職員組織が構築されていなかったため、地域と連携した意識改革・組織づくりが喫緊の課題だと考えた。

**目標・方針：**北九州市 SDG s クラブと連携し、地域・行政機関・一般企業・県内外の学校を巻き込んだ防災体験学習を実施することで、生徒の防災意識の高揚を図り、もって保護者及び地域住民の学校への安心感・信頼感を得ることができる。これは、SDG s (持続可能な開発目標)のゴール 11「住み続けられるまちづくり」につながるものである。また、この企画を職員全体で取り組むことによって、職員の自然災害へのリスクマネジメント能力、チームとしての学校力の向上が図れると考えた。(全体構想図)

**活動内容：**Zoom を活用して県内外の高校、北九州市危機管理室、NPO 法人 YNF、東京海上日動火災保険会社をリモートでつなぎ、「被災現場から学ぶ これからの避難・防災の在り方について」をテーマにしてパネルディスカッションを実施した。(写真) 実際に被災地の高校(九州北部豪雨:朝倉光陽高校、熊本地震:熊本マリスト学園高校、令和2年7月豪雨:大牟田高校)から当時の状況報告・問題提起をもとに高校生同士が意見交換を行い、新型コロナウイルス感染症対策や高齢者、女性の視点からの避難所の在り方について専門家からの助言を受けて有意義なディスカッションができた。パネリストについては、上記の6団体に加え、北九州市内の県立、市立、私立の学校(小倉西高校、北九州市立高校、明治学園高校)の合計9団体である。また、学校の体育館で1日宿泊して避難生活を送ることを想定した持参物を生徒同士で確認し合う協働体験学習や備蓄食(レスキューライス、堅パン等)の試食を行った。

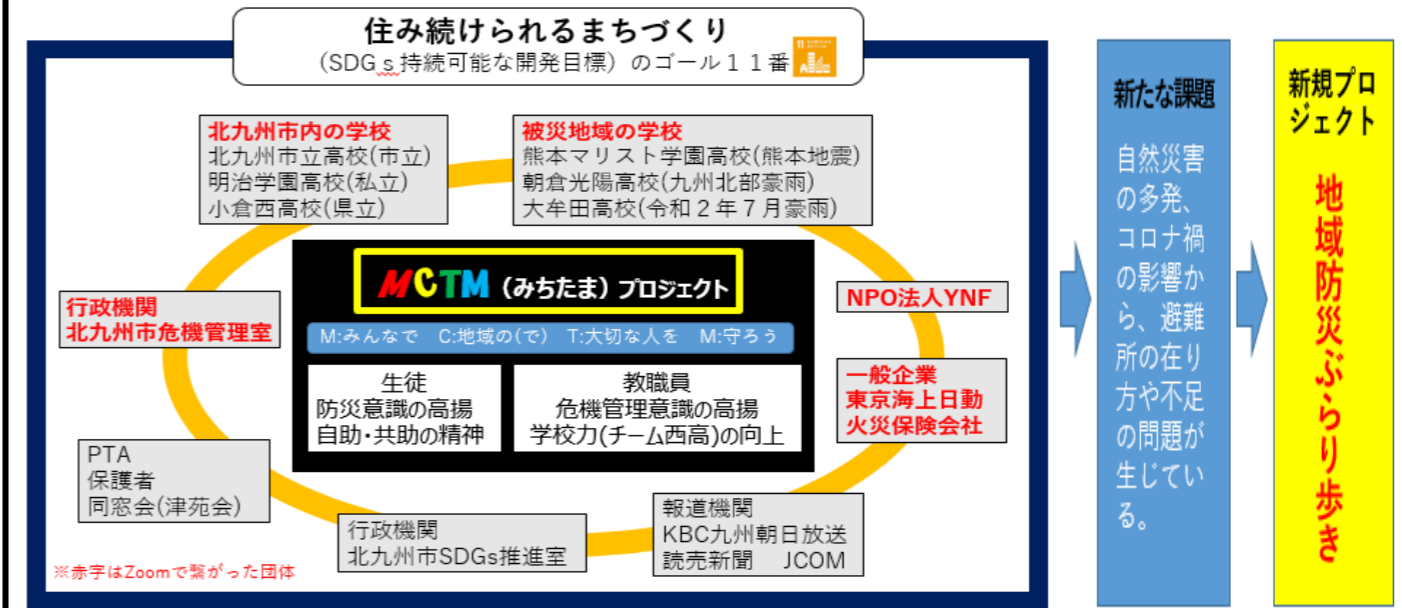
**活動の成果：**

- 生徒の防災意識(ハザードマップの確認や発災時の自助・共助の精神等)が向上した。これは、パネルディスカッションにおいて、被災地の高校生の実体験を生々の声で聞いたことが非常に大きかったと考えられる。(グラフ)
- パネルディスカッションに参加した高校生たちは、今後も連携を深めながら交流の輪を広げ、合同のボランティア活動等に発展させていくことを確認していた。
- 今回のリモートでの取組は、場所を共有できなくても、時間と空間を共有することで「人と人とのつながり」を実感でき、全体(生徒・学校・地域)がコロナ禍の中で「何ができるか」前向きになり意識改革につながった。
- 避難所の確保が新たな課題と分かり、生徒が寺や神社などに避難所として協力してもらえないか主体的に訪問・探索して働きかける「地域防災ぶらり歩き」を現在計画 중이다。

**アピールポイント (アイデアや工夫)：**

- 北九州市 SDG s クラブと連携して、ゴール 11「住み続けられるまちづくり」につながる取組である。
- リモートで県内外の高校、地域、行政、NPO 法人、企業がつながったパネルディスカッションの実施。
- 県立・市立・私立の垣根を越えた取組で、今後は「ALL 北九州市」の視点で連携を広げていくものである。
- 九州朝日放送(KBC)、読売新聞、J:COM 等の報道機関と連携し、地域の防災意識の啓発ができた。

<全体構想図>



<写真：パネルディスカッションの様子>



<グラフ：生徒の意識変化(事前事後)>

